漱石『三四郎』と『オルノーコ』について

小 鹿 原 敏 夫

（一）はじめに：二つの『オルノーコ』について

漱石の小説『三四郎』は明治 41 年（1908）の 9 月 1 日から 12 月 29 日まで朝日新聞に連載された。この作品は、九州から上京し帝大で文学を専攻する小川三四郎という青年が主人公である。物語は二十三歳の三四郎が、東京で佐々木与次郎、広田萇、野々宮宗八・よし子兄弟など様々な人物に出会うことを通じて展開する。そしてそれは最終的に三四郎が恋心を抱く里見美禰子という女性との関係の顛末に収斂する。

さて『三四郎』には二種類の『オルノーコ』が登場する。ひとつは十七世紀の「女性として最初の職業著述家」として知られる英国の女傑アフラ・ベーン（Aphra Behn 1640~1689）の小説『オルノーコ』(1688)である。オルノーコという名の黒人の王子が、南西アフリカ（現在のアンゴラまたはナミビア）から当時、英国の植民地であった南米のスリナムに強制的に連れさられたうえ、奴隷の境遇に落とされるという内容を持つ。『三四郎』では、三四郎がベーンの小説集を帝大の図書館で偶然見つけたということから作品内の話題として登場する。

帝大の選科生である佐々木与次郎が、アフラ・ベーンについて一高の英語講師である広田先生に尋ねる。

> 「全体何です、そのアフラ、ベーンと云ふのは」
> 「英国の閨秀作家だ。十七世紀の」
> 「十七世紀は古過ぎる。雑誌の材料にやなりませんね」
> 「古い。然し職業として小説に従事した始めての女だから、それで有名だ」
> 「有名ぢや困るな。もう少し伺つて置かう。どんなものを書いたんですか」
> 「僕はオルノーコと云ふ小説を読んだ丈だが、小川さん、さういふ名の小説が全集のうちにあつたでせう」
> 三四郎は奇麗に忘れてゐる。先生に其梗概を聞いて見ると、オルノーコと云ふ黒ん坊の王族が英国の船長に瞞されて、奴隷に売られて、非常に難義をする事が書いてあるのださうだ。しかも是は作家の実見譚だとして後世に信ぜられてゐたといふ話である。（四）全集⑤：384~385

もう一つの『オルノーコ』とはベーンの死後、アイルランド出身の劇作家トーマス・サザーン（Thomas Southerne 1660~1746）が、上記のベーンの小説を脚本に仕立てた戯曲

『オルノーコ 悲劇』（1696）である。『三四郎』では、再び広田先生が与次郎に戯曲の存在を教え、さらにそのなかに有名な句があることを告げる。

> 「今のオルノーコの話だが、君は疎忽しいから間違へると不可ないから序に云ふがね」と先生の烟が一寸途切れた。
> 「へえ、伺つて置きます」と与次郎が几帳面に云ふ。
> 「あの小説が出てから、サヾーンといふ人が其話を脚本に仕組んだのが別にある。矢張り同じ名でね。それを一所にしちや不可ない」
> 「へえ、一所にしやしません」
> 洋服を畳んで居た美禰子は一寸与次郎の顔を見た。
> 「その脚本のなかに有名な句がある。Pity's akin to love といふ句だが…」それ丈で又哲学の烟を熾に吹き出した。（四）全集⑤：386~387

他の漱石の作品と同様、『三四郎』にはアフラ・ベーンやトーマス・サザーン以外にも文学や絵画、さらに物理学といった多様な分野で活躍した多くの西洋人の名が言及されている。しかし、『三四郎』において最も重要な西洋人の列伝は英国十七世紀の文人であろう。次に挙げるのが同作に登場する英国十七世紀の著者と著作である。

【『三四郎』に登場する英国十七世紀文学作品】

- ○　ウイリアム・シェークスピア『ハムレット』（1602 成稿）
- ○　フランシス・ベーコン『エッセイズ』（1625 成稿）
- ○　サー・トーマス・ブラウン『ハイドリオタフィア』（1658）
- ○　アフラ・ベーン、小説『オルノーコ』（1688）
- ○　トーマス・サザーン、戯曲『オルノーコ 悲劇』（1696）

三四郎が九州から上京する列車のなかで最初に開いてみるのはフランシス・ベーコンのエッセイ集（1625 成稿）である（全集⑤：283）。そしてシェークスピアの『ハムレット』（1602 成稿）は広田先生が自分の独身主義を語る際に言及され（全集⑤:580）、また、三四郎とその仲間は文芸協会のハムレット劇を観劇する（全集⑤：589）。作品を通して美禰子が三四郎に空の雲の形状について何度も語りかけるのは、ハムレットがポローニアスをからかう場面のパロディーと思われる（全集⑤：376, 414）[(1)]。

小説の後半では、三四郎が広田先生に紹介してもらった医者でエッセイストのトーマス・ブラウン作『ハイドリオタフィア』（Browne 1658）に大いに感動し、ブラウンの美文調の散文を何度も自己流に日本語に訳してみせる。このように『三四郎』には十七世紀の英文学が横溢している[(2)]。

しかし上の表を英文学史の王道に近づけるためには、マイナーなベーンとサザーンを削除し、少なくともミルトン（John Milton 1608~1674）とドライデン（John Dryden 1631~1700）を加える必要があるだろう。特にベーンが活躍した王政復古の時代

（1660~1680）は後世「ドライデンの時代」とまでいわれる。これはドライデンが桂冠詩人として、スチュワート王朝への頌徳文を次々と執筆し、さらに劇作、古典文学（特にウェルギリウス）の翻訳でも時代を代表する傑作を残したことによる。

（二）小説版と戯曲版『オルノーコ』について

本章では、ベーンの小説『オルノーコ』（1688）のあらすじを示すとともに、それを原作とし、戯曲化したサザーンの戯曲『オルノーコ　悲劇』（1696）との相違について明らかにしておきたい[(3)]。

最初にベーンの小説『オルノーコ』の梗概を掲げる。この小説は全く章立てがなされていないので、便宜上、その展開から次の三部に分けることとする。

すなわち、以下のように名づける。

①「アフリカでの物語」
②「奴隷船での物語」
③「南米スリナムでの物語」

【小説『オルノーコ』のあらすじ】

①「アフリカでの物語」

南西アフリカの王族の王子であるオルノーコは、王である祖父を補佐する立場である。そして、実際の部族同士の抗争では、年老いた王の代わりに前線を指揮する勇者である。また彼はキリスト教の信者ではないが、高い道徳心を持つ。加えて英語とフランス語を解し西洋の教養も身に着けている。ただし、他の王族と同様に、オルノーコは他部族との抗争に勝利して得た捕虜を白人の奴隷商に売却することに関しては、まったく道徳的な問題はないと考えている。

ある日、オルノーコは美しい黒人女性、イモインダ（Imoinda）と出会い、恋に落ちる。二人は逢瀬を重ねるが、イモインダは王の後宮に召されてしまう。王は老齢のためにイモインダとの結婚を成就できない。しかし、王はイモインダがすでにオルノーコと関係を持ったことに激怒し、彼女を奴隷商人にこっそり売り渡す。オルノーコはその事情を知らされず、イモインダは王によって死刑に処せられたと信じ、悲しみに暮れる。そんなときオルノーコは英国人の奴隷船船長から船上での宴会に招かれる。しかしこれは罠であり、気づいたときはオルノーコとその仲間は奴隷船の牢に繋がれ、船は南米のスリナムに向かって出港していた。

②「奴隷船での物語」

オルノーコは自分が王族であり奴隷になる身分ではないとして釈放を要求するが、船内の牢に閉じ込められる。オルノーコは抗議のため断食を開始すると他の黒人奴隷もこれに倣って断食を始める。これに困った英国人船長はオルノーコを懐柔するために、次の寄港地でオルノーコを送り返すと約束する。しかしそれは嘘で、オルノーコ

は怒るが逆に、鞭打ちの刑を受けるはめになる。しかしオルノーコはスリナムに到着すれば植民地の知事がすべての誤解を解き、送り返してくれるだろうという船長の約束を信じる。

③「南米スリナムでの物語」

スリナムでは著者アフラ・ベーン自身がオルノーコと交流し、物語を実見譚として語る。スリナムに到着したオルノーコとその一行は奴隷として様々な植民地経営者に売られていった（この時代スリナムには 40 ～ 50 箇所のサトウキビ農園があった）。オルノーコ自身は英国人知事のプランテーションに売られていった。ところが知事は国外に滞在しており、オルノーコは自らの境遇を不当なものであると訴えることができない。しかし、オルノーコはその黒人らしからぬヨーロッパの貴族的な人格からカエサルと名付けられ、他の奴隷よりは多くの自由とよい待遇を与えられる。

ベーンとその友人たちはオルノーコに率いられ原住民（インディアン）の集落への冒険旅行を試みる。またオルノーコは死んだと思っていた（ここではクレメーンと名付けられた）イモインダと再会する。しかし白人の副知事がイモインダを愛人にしようと迫っていた。オルノーコは彼女を救い、二人は愛し合い、やがてイモインダは子供を身ごもる。オルノーコは自分とイモインダを解放してくれたら、その代わりにはるかに多くの黒人奴隷をアフリカから提供すると持ちかけるが、これも英国人植民者から拒絶される。このためオルノーコは他の奴隷たちから自由を求めて反乱を起こす指導者になることを懇願され、これを引き受ける。しかし反乱は最初、成功したようにみえたが、一部の黒人の離反もあり、失敗に終わる。オルノーコは、自分のような高貴な血筋はともかく、生まれの卑しいものは奴隷になって当然だという確信を深める。

オルノーコは拘束され、再び鞭打ちの刑を受ける。オルノーコは自分が死ねばイモインダも生きていけないと悟り、自らの手で身重のイモインダの命を奪う。最後にオルノーコは英国人に捕らわれ、鼻をそがれ、四肢を切断され惨たらしく殺される。しかしオルノーコは処刑される間、タバコを吸いながら耐え、ひとことも声を上げることはなかった。

現在、この小説はベーンによる奴隷制への批判を意図した作品と理解されることが多い。しかし、王党派のベーンによるスチュワート朝への挽歌として解釈する方が同時代の読みに近いと思われる。このような同時代人の英国人の読み方としては二つ考えられる。ひとつには、オルノーコとはジェームズ二世自身のことであるとする。そしてイモインダはジェームズ二世の王妃メアリーとするものである。彼らの間には王子が 1688 年に生まれた（James Francis Edward 1688~1766）。しかし、この王子がジェームズ三世として王となることはなかった。生まれてすぐに名誉革命（1688）が勃発し、両親とともにフランスへの亡命を余儀なくされたのである。カソリックのスチュワート朝の成立を恐れたプロテスタントの議会派が、オランダからウィリアム・オレンジ公を担ぎ出し、ジ

ェームズ二世の王位を奪った。『オルノーコ』のイモインダの胎内で絶えた子供はこの王子の比喩であったとする見方である（Duffy 1977:275）。

もうひとつの読み方は、オルノーコはモンマス伯（Duke of Monmouth 1649~1685）のことであるとする。モンマス伯はチャールズ二世の庶子であるが、1685 年に叔父でカソリックであるジェームズ二世の王位継承に反対して反乱を起こした。しかし、ジェームズ二世はこの反乱を鎮圧すると無情にも従弟のモンマス伯の首を刎ねた。さらに反乱に参加した者のうち、主要な三百人を八つ裂きに処し、この極刑を逃れた者は高貴の身分な者も奴隷として植民地に売られた。彼らは『オルノーコ』で奴隷として売られ、最後には無残に死刑にされるオルノーコの運命を彷彿させる（Corns 2014:415）。

次に、ベーンの小説『オルノーコ』（1688）と比較したサザーンによる戯曲『オルノーコ　悲劇』（1696）の特色を（Ⅰ）～（Ⅵ）として列挙したい。

【戯曲『オルノーコ　悲劇』の特色】

（Ⅰ）戯曲であることから、語り手（アフラ・ベーン）の実見譚という形式は採らない。しかし、英国人の女性が資産を持つ婿を植民者のなかから探しにスリナムに行くというサブ・プロットがサザーンの戯曲にある。

（Ⅱ）原作に倣いオルノーコは「黒人」らしからぬ高貴な人物であるとするが、これを強調するためであろうか。オルノーコの台詞の多くがブランク・ヴァース（blank verse）を用いて書かれている。これはシェークスピア劇によく用いられた弱強五歩格の韻律である。

（Ⅲ）オルノーコの妻、イモインダは黒人ではなく白人女性である。これは白人の女優に黒い染料を塗ることに無理があったとも考えられる。しかし、サザーンはシェークスピアの『オセロ』（初演 1604）にみられるオセロとデズデモーナの異種族通婚を盛り込みたかった可能性が大きいと思われる。

（Ⅳ）オルノーコはスリナムの農場で、かつてアンゴラで自分の召使いであったアボアン（Aboan）という奴隷に再会する。アボアンはオルノーコに全ての奴隷を率いて反乱を指揮して欲しいと懇願する。しかしオルノーコは彼ら（英国人植民者）は黒人を正当に買い取ったのであり、オルノーコは黒人が彼らの財産であることを尊重するという。そして英国人が我々を奴隷にしたのではなく、奴隷制という制度がそうしたのだという不思議な論理で懇願を一度は拒絶する。これはサザーンがオルノーコの口を借りて、英国人、特に植民地進出に積極的であったウィッグ党の海外植民地経営に対する態度を代弁したものとみられる。結局、戯曲のオルノーコも小説『オルノーコ』と同様に、自分自身とイモインダ、そして生まれてくる子供の幸せを確保したいという理由で奴隷の反乱を指揮することを引き受け

る。

（V）オルノーコの最期が大きく異なる。オルノーコは反乱が失敗した後、イモインダの合意のもとに彼女の命を奪うのは小説と同じであるが、戯曲では、オルノーコは次に自分を誘拐した英国人船長を殺し、その後に執拗にイモインダを妻にしようとしていた英国人の副知事を刺し殺す。そして最後にナイフを自分に向け名誉の自害を遂げる。

（VI）広田先生が教示しているように、原作にはないオルノーコの台詞 Pity is akin to love. が戯曲に出てくる（第二幕、第一場）。この台詞は十九世紀にはたいへん有名になり、名言辞典の多くに収録されていたようだ[(4)]。『三四郎』（四）では、この台詞を与次郎が「可哀想だた惚れたつて事よ」と男女の関係のように訳し、広田先生の「不可ん、不可ん、下劣の極だ」という批判を浴びている（全集⑤：387）。実際これは男性から男性への台詞である。スリナムでのオルノーコの惨めな境遇に同情の意を表した英国人の植民者ブランドフォードに、オルノーコが「君が僕を同情しているという言葉は本当にありがたい」ということを芝居気たっぷりに表現したものである。（Ⅱ）でのべたようにオルノーコはシェークスピア劇のような台詞を口にする教養人として描かれているのである。

（三）アフラ・ベーン、「植民地文学」とラフカディオ・ハーンについて

ベーンは十七世紀末に没してから、長い間、英文学史家から軽視されてきた[(5)]。しかし、ベーンは二十世紀後半のポスト・コロニアリズムの思潮のなかで再発見された。それはベーンの晩年の小説『オルノーコ』(1688) と戯曲『ランター未亡人（The Widow Ranter）』（1702 死後出版）が、「植民地文学」（Colonial literature/discourse）というジャンルの先駆者であったという見解に基づく。十七世紀に入ると西洋諸国は、南北アメリカ、そしてカリブ海諸島といった新世界での植民地経営を本格化させた。そんな時代に欧州からはるかに隔たった植民地を舞台にして、征服者としての白人、被征服者としての原住民、そしてアフリカから連れてこられた黒人奴隷という三者の関係を軸とした「植民地文学」が生まれたとされる。

『オルノーコ』は、当時の英国の植民地であった南米のスリナムを舞台にしている。『ランター未亡人』は北米のヴァージニア植民地で起こった植民地政府に対する反乱（Bacon's Rebellion 1676）をモデルにしていると考えられる。英国は十九世紀中葉に世界の三分の一を植民地化するが、十七世紀末はスペイン、ポルトガルに出遅れ、まだその出発点にあり、この二つは数少ない植民地であった。ポスト・コロニアルな読み方は、これら「植民地文学」の中に、奴隷と原住民に対する征服者（白人）の態度に西洋人の欺瞞と傲慢があぶりだされているということや、逆に被征服者や黒人奴隷の文化が白人に影響を与えたことなどの、三者の複雑な関係を探ろうとする試みである[(6)]。

ところで、漱石にとって『オルノーコ』はどのようにして『三四郎』とつながったのであろうか。私見では、漱石が『オルノーコ』に注目したのは、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn 1850~1904）の小説の系譜を遡ってベーンを発見したことによると思える。ハーンは帝大、一高の英文学講師として漱石の前任者であった。明治 36 年（1903）2 月にハーンが退官すると、同年 4 月にロンドン留学から帰国して間もない漱石が任官している。漱石がハーンを帝大の前任者として意識したのは当然であろう。

『三四郎』のモチーフのひとつが与次郎を中心にした帝大の教授人事に関する運動である。それは「偉大なる暗闇」こと広田先生を帝大の教授に据える事を目的としていた。この運動は与次郎の奮闘も空しく頓挫してしまう。三四郎は帝大の講義室で始めて与次郎に出会うが、その直後、与次郎はハーン（小泉八雲）について語る。ちなみにハーンは 1904 年 9 月に没している。

> （与次郎は）死んだ小泉八雲先生は教員控室へ這入るのが嫌で講義が済むといつでも此周囲をぐる／＼廻つてあるいたんだと、恰も小泉先生に教はつた様な事を云つた。（三）全集⑤：314~315

ハーンは生涯に二篇の小説を執筆した。それが『チータ』（1889）と『ユーマ』（1890）である。どちらも日本に来る前に滞在した異郷での見聞に基づく作品である。これらは「植民地文学」の範疇に入れることが可能であろう。

東京帝大の講師に採用された際、ハーンの文学的名声はこの二つの作品に拠っていた。『チータ』はメキシコ湾の孤島を、『ユーマ』はカリブ海のフランス領マルチニーク島を舞台にしている。前者は 1856 年の実際に北米ルイジアナで起こった大ハリケーン災害に基づいており、そのとき家族と離れ離れになった五歳のクレオールの少女が成長し、やがて父親と再会する話である。そして後者は 1840 年代にマルチニーク島で実際に起こった黒人奴隷の反乱に基づいており、黒人の奴隷少女ユーマが主人公である。彼女は白人家族に子守として同居していた。しかし、自由を求める黒人たちの暴動で主人の家が火事になったとき、黒人の恋人を捨てて、白人の娘を助けるために自らの命を犠牲にする。ここには黒人奴隷のなかにも、他の奴隷はもとより、支配者の白人以上に高貴な精神を有する者がいるというハーンの主張があるようだ。しかし、ユーマの「高貴な精神」とは、意地悪に解釈すれば、白人支配者に都合のよいものであるという点でオルノーコの白人の理不尽さへの抵抗とはまったく異なるといえるだろう。

（四）アフラ・ベーン、王政復古喜劇と『三四郎』について

アフラ・ベーンは死後、著名な文人として（聖堂の入り口というあまり良くない場所ではあるが）ウェストミンスター寺院に埋葬されている。ベーンは王政復古の十七年間の活動期間に十七の芝居をロンドンの劇場にかけた。これは同時代のどの劇作家よりも多い数である。しかもロンドンに劇場が二つしか認可されていなかった時代のことであ

る[7]。いかにベーンが劇作家として成功したかがわかる。またベーンは詩人としてはロチェスター伯（2nd Earl of Rochester 1647~1680）を代表とする放蕩派の詩人グループに属しており、大胆に性愛を題材に採った作品を発表していた。これらの活躍によりベーンは生前から、紀元前六世紀頃の偉大なギリシアの女流詩人サッフォーにもなぞらえられた。この「サッフォー」という呼び名は、すぐれた女流文人としてベーンを称賛する側と、恋愛遊戯を好む放蕩女の代表として中傷する側の両方によって用いられていた。

『三四郎』では美禰子に（サッフォーのような）作家としての資質があるように書かれている。よし子は運動会からの帰り道、崖に差し掛かると、サッフォーが美少年パオンとの悲恋のために断崖から飛び降りた故事を踏まえて話す。そして三四郎は美禰子とともに追従笑いをしてみせる。これは『オルノーコ』の作者ベーンと美禰子を結びつける鍵の一つであろう。

> 「絶壁ね」と大袈裟な言葉を使つた。「サツフオーでも飛び込みさうな所ぢやありませんか」
> 美禰子と三四郎は声を出して笑つた。其癖三四郎はサツフオーがどんな所から飛び込んだか能く知らなかつた。（六）全集⑤：450

ベーンの生い立ちに関しては諸説あるが、高貴な生まれではなく英国南東部のカンタベリー周辺の中間層の家庭にアフラ・ジョンソン（Aphra Johnson）として生まれたということでは一致している。そして一家はスチュワート朝を支持する王党派の家系であった。『オルノーコ』のなかでは父親が南米スリナムの植民地監督官として派遣されるのに同行して、スリナムにベーンも渡ったと記されている。しかし父親は彼の地に渡る渡航中に病死し、ベーンは一年ほどスリナムに滞在した後、帰国したとしている（1663 年頃とされる）。これは『オルノーコ』執筆のための作り話であるという批判は同時代にもあった。しかしながら現代のベーン研究では、ベーンが何らかの方法で数か月スリナムに滞在したことは事実と認めている見解が優勢である。なおスリナムは、1667 年には、英国からオランダの植民地に移管され、オランダから独立を果たしたのは 1975 年である。

英国に帰還後、アフラ・ジョンソンは結婚し、ベーン（Behn）という姓を得るが、ベーン氏については、どのような人物であったか全く分かっていない。離縁したのか死別したのかさえ不明である。（アフラ）ベーンは語学に堪能であったようで、イギリスとオランダが緊張関係にあった 1665~1666 年にチャールズ二世の命を受け、密偵としてアントワープに滞在したことは記録が残っている。

ベーンの劇作家としての活動はこのアントワープ滞在から帰国してから始まった。王政復古の時代（1660~88）のロンドンの劇場では、その前の共和制の抑圧されていた社会への反動から、あけすけな男女の恋の駆け引きをテーマにした喜劇が人気を博した。実際クロムウェルの時代には演劇は浮薄であるとしてすべての劇場が閉鎖されていたのである。「王政復古喜劇」（Restoration comedy）は赤裸々に男女の性的放縦をも描き、女性も男性に負けずに積極的な立場をとる。たとえばベーンの代表作“The Rover”（1677 初

演）は王党派の騎士ウィルモアに対し、高級娼婦のアンジェリカと男装の麗人ヘレナが恋敵として丁々発止を繰り広げる。

『三四郎』の与次郎は、我儘で普通の女性以上の自由を有する美禰子を評してイブセン流であるという（全集⑤：430,494）。しかし美禰子には、むしろ「王政復古劇の放蕩女」（Restoration rake）の面影はないだろうか。彼女たちは男勝りで、男性に対して物怖じしない。そしてなにより恋愛遊戯に長けている。たとえば美禰子は堂々と理学士、野々宮宗八に「空中飛行器」の詩的解釈を主張して譲らない（全集⑤：404~5）。さらに美禰子と野々宮宗八の間には、恋の駆け引きが三四郎の知らないところで展開されているのは確かのようだ。たとえば、美禰子に小間物屋でリボンの贈り物を買う野々宮の姿がある（全集⑤：307）。そして美禰子は野々宮の面前で、三四郎に囁くふりをする。これには野々宮に嫉妬心を持たせようと目論む権謀家の姿勢が垣間見える（全集⑤：504）。しかも美禰子は野々宮との恋の当て馬に三四郎を利用しておきながら、小説の末章で、どちらでもない男との結婚をあっさりと決める（全集⑤：604）。これらは王政復古喜劇に比べれば、はるかに抑制された男女の駆け引きであるが、その手管に共通するものがあるのではないだろうか。

一方、野々宮よし子の方は、男性に媚びるところのない上流階級の無垢な女性のタイプである。男に関して無知で無防備であるがゆえに、かえって三四郎を奴隷のように振る舞わせる。これは王政復古喜劇によく登場する無邪気な「処女」の役柄と共通する。

> 三四郎は無邪気なる女王の前に出た心持がした。命を聴く丈である。御世辞を使ふ必要がない。一言でも先方の意を抑へる様な事をいへば、急に卑しくなる。唖の奴隷の如く、さきの云ふが儘に振舞つてゐれば愉快である。三四郎は子供の様なよし子から子供扱ひにされながら、少しもわが自尊心を傷けたとは感じ得なかつた。（五）全集⑤：393~394

さらに王政復古喜劇に不可欠な、憎めないマッキャベリアンで放蕩者の姿は佐々木与次郎にみることができる。与次郎は文芸雑誌に広田先生を称賛する「偉大なる暗闇」なる匿名論文を投稿する。しかし広田先生の教授就任運動は失敗する。その直後、匿名論文の著者は小川三四郎であるとの新聞記事が出る（全集⑤：562）。この噂を流したのは与次郎自身ではないだろうか。また与次郎は、広田先生から預かった二十円もの大金を競馬で散財してしまい、三四郎から借り入れて穴埋めする。しかしその後、三四郎への返済の意図はまったくみられない（全集⑤：479）。最後に与次郎は、女性を誘惑するのに自分は医学生だと偽ることも辞さない破廉恥な男であることを自ら三四郎に語る（全集⑤：595~596）。

ベーンの王政復古喜劇は十八世紀になると上演されることが稀となった。そして「女性として最初の職業著述家」としてベーンの名声はむしろ悪口となった。つまり女だてらに娼婦や放蕩者ばかり登場する芝居、詩、小説を実名で書いた作家ということで、特に男性作家から嫌われるようになった。たとえば前述の劇作『ランター未亡人』のラン

ター未亡人は男装してヴァージニア植民地で英軍の統治者への反乱に参加し、彼女は刀をもって戦闘に参加する。しかし十八世紀以降の（主として男性作家によって書かれた）小説や劇作に登場する女性は、そのような男勝りの女性像が描かれることはなく、（表面的であれ）おとなしい淑女としての姿が好まれるようになった。

また中流階級以上の女性が、職業作家として実名で小説を出版することなど下品な試みとみなされ社会的に受け入れがたくなった。それゆえ匿名か仮名を使うのが慣習となった。この傾向は十九世紀も続いた。実際、漱石も高く評価する女流作家ジェーン・オースティン（Jane Austen 1775~1817）が、最初の小説『分別と多感』（Sense and Sensibility）を 1811 年に出版したときにも著者名は匿名（by a lady）とされた。そしてこの匿名性はオースティンが死去するまで続いた。

（五）三四郎とオルノーコの「黒さ」とアフリカについて

ベーンの『オルノーコ』の正式な表題は“Oroonoko or The Royal Slave, A True History”である。『オルノーコ　または王族の（高貴な）奴隷、実見譚』とでも訳せるだろう。「王族の（高貴な）奴隷」という言葉は、奴隷という身分で「高貴」であるはずがないので、これは撞着語法である。いうまでもなく、ベーンの時代から近代に至るまで、「白い肌」は洗練された西洋の教養と高い道徳を持つ人々を表し、「黒い肌」は未開で野蛮な人々を象徴していた。しかし、ベーンはオルノーコに「黒人」離れした高貴な魂と肉体があるとした。それはオルノーコが通常の黒人の「黒さ」を超越して、威厳ある素晴らしい「黒檀のような黒さ」（perfect Ebony）を持つとされていることに象徴されている。オルノーコの顔立ちに関しては、それは典型的なアフリカの黒人の様ではなく、鼻はローマ人風で唇も形よく、オルノーコはヨーロッパの貴種に劣らないことを付け加える。そしてオルノーコは神話的に強靭な肉体を備えており、スリナムではトラや電気ウナギのような猛獣も退治できる英雄であることがベーン自身の実見譚として語られる。

スリナムで奴隷の境遇に落とされたオルノーコがカエサル（Caesar）と呼ばれたのは、このように他の奴隷とは一線を画した高貴な外見とそれに見合った精神を持つことによる。オルノーコに遭遇した原住民（インディアン）も敬意を払わざるを得ない所以である。しかし、キリスト教徒である英国人の植民者の一部は、どうしようもなく粗野で腐った道徳心の持ち主である。人の善意や名誉を信じるオルノーコは、これらの卑劣な「白い人」に何度も裏切られる。オルノーコの妻であるイモインダもオルノーコにふさわしい神話的な美しさを持つ「黒いヴィーナス」として描かれている。

漱石が『三四郎』の第三章を執筆中に、思いつきで『オルノーコ』を登場させたのではないことは明らかである。それは第一章の冒頭で三四郎が福岡から東京に向かう汽車のなかで京阪神に近づくと、女の色が次第に白くなると感じる場面に現れている。そして三四郎は京都から乗り合わせた女の肌の色が珍しく「黒い」すなわち「九州色」であることで懐かしく感じる（全集⑤：273）。この場面は後にオルノーコの「黒さ」を連想させる伏線であると考えられる。

さらに浜松で見かけた西洋人（白人）の団体の姿が美しいと感嘆する三四郎がいる。

> かう云ふ派手な奇麗な西洋人は珍らしい許りではない。頗る上等に見える。三四郎は一生懸命に見惚れてゐた。（一）全集⑤：290

そして東京では三四郎とオルノーコの「黒さ」が明確に結び付けられる。

> 「面白いな。里見さん、どうです、一つオルノーコでも書いちやあ」と与次郎は又美禰子の方へ向つた。
> 「書いても可ござんすけれども、私にはそんな実見譚がないんですもの」
> 「黒ん坊の主人公が必要なら、その小川君でも可いぢやありませんか。九州の男で色が黒いから」
> 「口の悪い」と美禰子は三四郎を弁護する様に言つたが、すぐあとから三四郎の方を向いて、「書いても可くつて」と聞いた。（四）全集⑤：385~386

『三四郎』の時代、オルノーコの子孫であるアフリカの「黒ん坊」たちはどのような境遇にあったのだろうか。十九世紀末、アフリカの奴隷貿易は下火になったものの、欧米列強の直接的なアフリカの植民地支配と蹂躙は強まっていた。英国は 1898 年にキッチナー元帥の軍隊が 1881 年から続いていた南スーダンのマフディーの反乱を虐殺に近い形で制圧した。またドイツの植民地と化していた南西アフリカのナミビアでは、帝国ドイツ軍がヘレロ族とナマ族の蜂起に対して冷酷な殲滅作戦を 1904 年から 1907 年まで展開し、女、子供を含む七万人が犠牲になりナミビアの社会基盤が完全に崩壊した（Schaller 2013:90）。さらに内陸のコンゴでは、ベルギーのレオポルドⅡ世が 1885 年から 1908 年まで、コンゴを「私有地」として、稀に見る非人間的な搾取と虐待を原住民に対して行っていた。このことは英議会に提出された「コンゴ報告書」（1904）によって全世界に知れ渡った[8]。美禰子が本気で二十世紀初頭の「オルノーコ」を書くのならば、それは前作以上に凄惨な悲劇にならざるを得なかったろう。またその悲劇の舞台は、スリナムに移動する必要がなく最後までアフリカであったに違いない。

（六）おわりに

十八世紀後半より英国で奴隷貿易への批判が高まると『オルノーコ』は、もっぱら黒人の王子がアフリカから無理やり連れ去られ、スリナムで奴隷の身分に落とされるという非人道性を批判した小説あるいは戯曲として広く知られるようになった。

三四郎の場合はオルノーコのように騙されて故郷から連れさられたのではなく、自らの意志で帝国大学に進学するために東京に向かった。しかしながら、漱石は三四郎にオルノーコと同じ「奴隷に落とされた青年」という境遇を重ねていなかっただろうか。つまり三四郎が列車で向かった「東京」にオルノーコの「スリナム」が重ねられていたの

ではないか。三四郎の場合はあくまで精神的な意味合いの「植民地」であり、肉体的な強制を伴う場所ではない。しかしオルノーコも三四郎も共に「奴隷」にされるために故郷を去り、異郷に向かったという寓意があったのではないか。

漱石に以下のような、ある種の日本人は「西洋ノ理想」に圧倒されている奴隷だとした断片（1906 断片 35D）がある。

> 理想ハ自己ノ内部ヨリ躍如トシテ発動シ来ラザル可ラズ。奴隷ノ頭脳ニ何等ノ雄大ナル理想ノ宿リ得ル理ナシ。西洋ノ理想ニ圧倒セラレテ目ガ眩ム日本人ハアル程度ニ於テ皆奴隷ナリ。奴隷ヲ以テ甘ンズルノミナラズ、好ンデ奴隷タラントスル者ニ如何ナル理想ノ脳裏ニ醗酵シ得ベキゾ。既ニ理想ノ凝ツテ華ヲ結ブ者ナクンバ芸術ハ死屍ナリ〔この項抹消〕（全集⑲：248）

広田先生が初対面の三四郎に、日本一の名物は富士山であるが、それは天然自然の産物で日本人が拵えたものではない。このままでは日本は「亡びるね」と言い切った事（全集⑤：292）と、この断片はつながると思える。つまり日本人が、自分たちの「雄大ナル理想」を苦労して模索しないで、今のように「西洋ノ理想」を奴隷のように追い求めていればいずれ破滅するであろうという警告である。ここで漱石は、日本人が「西洋人の奴隷」であるというよりも、「西洋の理想」に対する奴隷であるといっているようだ。当時の「西洋の理想」とは、畢竟、植民地の拡大を通じて帝国主義国家として勝者になることではなかったか。

さて二十世紀に入るとようやくアフラ・ベーンの再評価が始まる。その第一のきっかけは「王政復古の演劇」（Restoration Drama）の研究家サマーズ（Montague Summers 1880~1948）による『アフラ・ベーン全集』（Summers 1915）の刊行であった。これは五十部の限定出版であったが、この全集は史上初めてベーンの演劇、小説そして詩作のすべてを集めたものであった。いうまでもなく漱石が『三四郎』（1908）執筆前にこの全集を見ることはできなかった。

二十世紀後半のアフラ・ベーン評価の急速な高まりをみるにつけ、漱石が『三四郎』において、当時は評価の低かったアフラ・ベーンを採りあげたのは慧眼であったと思える。英国でのアフラ・ベーン再評価が決定的になったのは、はるか漱石の死後のことである。それは二十世紀を代表する女流作家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf 1882~1941）が著書（Woolf 1929）のなかで「アフラ・ベーンはすべての女性が、彼女の墓所に花束をささげるべき存在」と称えたことが大きなきっかけとなった[(9)]。ウルフはフェミニストの視点からアフラ・ベーンが最初の女流職業作家として、女性に新しい表現の可能性を与えたとして評価した。その後、Duffy（1977）と Goreau（1980）という二つの優れた評伝が書かれた。そして 1986 年にローヤル・シェークスピア・カンパニーがベーンの代表的な王政復古喜劇 The Rover（初演 1677）を再演するに至って二十世紀におけるアフラ・ベーンの復権は完成したといえよう。

［注］

(1)（Hamlet 1602 第三幕、第二場）

HAMLET　Do you see yonder cloud that's almost in
shape of a camel?
POLONIUS　By th'mass, and 'tis like a camel indeed.
HAMLET　Methinks it is like a weasel.
POLONIUS　It is backed like a weasel.
HAMLET　Or, like a whale?
POLONIUS　Very like a whale.

ここではハムレットがポローニアスに空の雲の形がラクダに見えたかと言うといやイタチだ、鯨だと言い換えるが、そのたびポローニアスは、まことに仰せの通りでございますと返事をする場面である。後にハムレットは叔父の王を殺すつもりで誤ってポローニアスを刺し殺す（第三幕、第四場）

(2) 漱石は十八世紀の英文学に関してはまとまった講義録（全集⑮）を残しているが、十七世紀に関してはそのような講義録を残していない。しかし、漱石は十七世紀英文学にも熟知していた。

(3) ベーンの小説集の出版状況を考えると、漱石が読んだアフラ・ベーンの小説集とは『アフラ・ベーン夫人の小説：E.A.ベーカー解説、編集』（Baker 1905）の可能性が高いと思われる。これ以前の 1871 年にベーンの小説集が限定出版されたというが、漱石がこれを見た可能性は低いとみられる。ベーカーは巻頭解説（Baker 1905:xxiv）で、サザーンがベーンの小説『オルノーコ』を使って「ひどい悲劇」（a very bad tragedy）を書いたと説明している。これは広田先生が与次郎に「あの小説が出てから、サゞーンといふ人が其の話を脚本に仕組んだのが別にある。矢張り同じ名でね。それを一所にしちや不可ない」（全集⑤：386）の典拠ではないか。ただしベーカーは戯曲に特有の Pity is akin to love.というオルノーコの台詞については触れていない。

(4) 漱石蔵書目録にもある『諺・名言辞典』（Christy 1887:128）にも Pity is akin to love.がある。ただし出典は記されていない。

戯曲『オルノーコ』の Pity's akin to love.に関してサザーンはおそらくシェークスピアの『十二夜』（Twelfth Night 初演 1601）の次の台詞からヒントを得たと考えられている。

VIOLA　I pity you.
OLIVIA　That's a degree to love.
VIOLA　No, not a grise;
For'tis a vulgar proof,
That very oft we pity enemies.

（『十二夜』第三幕、第一場）

『十二夜』では小姓「セザリオ」と名乗り、男装したヴィオラという女性が登場する。ヴィオラは主人オーシーノの使いで、求愛を伝えにオリヴィア姫を訪れる。しかし、その使者「セザリオ」にオリヴィア姫は一目ぼれしてしまう。オリヴィア姫の求愛に対し、正体を明かせないヴィオラは困ってしまい、I pity you.「あなたに同情する」と発した。それに対し、オリヴィア姫が That's a degree to love.「その同情は私を愛することへの一歩に等しい」と受けたものである。そしてヴィオラは「いや、そんなことはありません。闘いにおいて我々はよく敵に同情す

ることもありますから。」と返した。与次郎の Pity's akin to love.の俗謡風の訳、「可哀想だた惚れたつて事よ」は『十二夜』のオリヴィアの台詞に関してはよく当てはまっているといえよう。付け加えれば、碩学の広田先生が戯曲のオルノーコの台詞が男性に向かって発せられたことを指摘しなかったのは不思議である。漱石自身、名言辞典でこの台詞を知っただけで戯曲『オルノーコ』を読む機会に恵まれなかったのかもしれない。

(5) 漱石と同時代で広く英文学史の第一人者とされていたゴス（Edmund Gosse1849~1928)の『簡易英文学史』(Gosse 初版 1897）にはアフラ・ベーンの記述がまったくない。そして王政復古期の演劇全般に対する評価は低い。

(6) ポスト・コロニアリズムの視点での西洋近代文学の読み直しは、サイードの著書『オリエンタリズム』(Said 1978）をきっかけにして広く行われるようになった。

(7) the King's Men と the Duke's Company という二つの劇場が 1660 年から 1682 年までロンドンに存在した。

(8) アイルランド人で英国の外交官であったケースメント（Roger Casement 1864~1916）が作成し、英国議会に提出した「コンゴ報告書」(1914）はレオポルド II 世による原住民への搾取と非情な残虐行為を全世界に明らかにした。これがきっかけとなり 1908 年にベルギー議会は、レオポルドⅡ世からコンゴ自由国の私有権を取り上げた。

(9) 'All women together ought to let flowers fall upon the tomb of Aphra
Behn which is, most scandalously but rather appropriately, in Westminster Abbey,
for it was she who earned them the right to speak their minds.'(Woolf 1929:98)

［参考文献］

全集⑤：『三四郎』漱石全集　第五巻　夏目金之助　岩波書店　1994

全集⑲：『日記・断片　上』漱石全集　第十九巻　夏目金之助　岩波書店 1995

Bacon(1905)：Bacon's Essays, Francis Bacon, Edited by F. G. Selby, London 1905

Baker(1905)：The Novels of Mrs Aphra Behn with an Introduction by Earnest A.Baker, London 1905

Behn(1992)：Oroonoko, The Rover and Other Works. Edited by Janet Todd, London 1992

Browne(1967)：The Prose of Sir Thomas Browne, Religio Medici, Hydriotaphia etc. Edited by Norman J. Endicott New York 1967

Christy(1887)：Proverbs Maxims and Phrases of all ages, 2 vols, edited by Robert Christy, New York 1887

Corns(2014)：A History of Seventeenth-century English Literature, Thomas N.Corns, Oxford 2014

Duffy(1977)：The Passionate Shepherdess, Maureen Duffy, London 1977

Goreau(1980)：Reconstructing Aphra: A Social Biography of Aphra Behn, Angeline Goreau, Oxford University Press, 1980

Gosse(1897 初版)：A Short History of Modern English Literature, Edmund Gosse, First Edition 1897, 10th Edition London 1923

Hearn(1889)：Chita, A Memory of Last Island, Lafcadio Hearn, New York, 1889

Hearn(1890)：Youma, The Story of a West Indian Slave, Lafcadio Hearn, New York, 1890

Said(1978)：Orientalism, Edward W. Said Pantheon Books, 1978

Schaller(2013) : Chapter III. 'The Genocide of the Herero and Nama in German South West Africa 1904~1907', by Dominik J. Schaller, Centuries of Genocide, Essays and Eyewitness Accounts, Fourth Edition Edited by Samuel Totten and William S. Parsons, Oxford, 2013

Southerne(1871) : Oroonoko, A Tragedy in five acts by Thomas Southerne, Dick's British Drama Vol.IX London, 1871

Sourtherne(1988) : The Works of Thomas Southerne, 2 vols, edited by Robert Jordan and Harold Love, Clarendon Press 1988

Summers(1915) : The Works of Aphra Behn , 6 vols, Montague Summers, London 1915

Todd(1996) : Aphra Behn Studies, Edited by Janet Todd, Cambridge University Press, 1996

Todd(1996) : The Secret Life of Aphra Behn, Janet Todd, London 1996

Woolf(1929) : A Room of One's Own, Virginia Woolf, London, 1929

（おがはら　としお・本学文学部非常勤講師）